

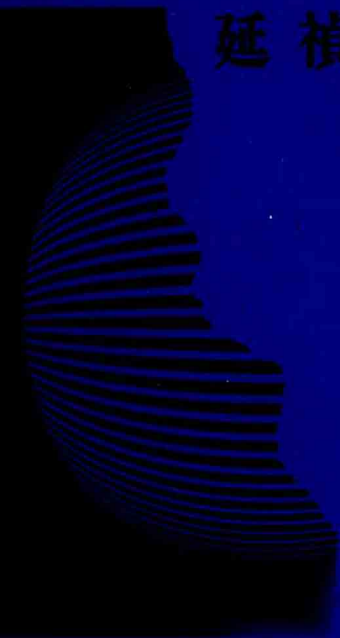
キヤン機関からの証言

延 禎



キヤン機関からの証言

延 禎



番町書房

△著者略歴▽

延 禎 (ヨン ヤン)

一九二五年ソウル生まれ。中央大学法学部入学後、四四年学徒志願兵として入隊し、錦州の関東軍に配属。終戦と同時に部隊をはなれ、ソウルに辿りつく。一九四九年Z機関に参加。五二年はじめに機関が解散されるまで、キャノン中佐の片腕として、日本、アメリカ、朝鮮半島をまたにかけて、Z機関の主要な諜報工作を展開した。現在、電子工業会社を経営、在東京。

キャノン機関からの証言

定価六三〇円

昭和四十八年 三月二十日 初版印刷

昭和四十八年 三月三十一日 初版発行

検印廃止

著 者 延 禎

発 行 者 遠 藤 左 介

印 刷 松 濤 印 刷 株 式 会 社

製 本 加 藤 製 本 株 式 会 社

発 行 所 (主 婦 と 生 活 社 内)

番 町 書 房

東京都中央区京橋三ノ五 一〇四 ©一九七三
TEL(五六七)〇三二一(代) 振替東京一五八四四

この本に寄せて

読者の皆さん。皆さんは多分、エスピオナーゼ (Espionage)、すなわちスパイ活動を一部の冒険好きな人たちが、暇な時間をついやすのに魅力のある仕事でもあるように考えることでしょう。

皆さんの考えでは、これら非常に愉快なスパイたちは、常に美食と美服のぜいたくな暮らしをしており、最も官能的な敵側の女スパイを相手にして立回りを演じるということを考えることでしょう。

彼等スパイたちは、無制限な支援を彼等自身の政府から受けており、そして最も深刻な災難といっても、せいぜいつめの根のささくれ立つことか、または、たびたびの二日酔いにみまわれる程度のものです。もし皆さんがこれをお疑いなら、スパイ小説か、たくさんのテレビ映画の連続スパイものどれかひとつを御覧になればよろしいでしょう。

しかし実際的には、その全く逆が本当なのです。有能なエージェント (職業情報官はスパイといわずエージェントという) は、自分の名をいわないか、匿名をむしろ選びます。彼 (スパイ) が良い暮らしができるか、できないかは、彼の任地によってきまりますし、彼等の仕事がつまらないものになるか、正確を要する退屈なものか、あるいは危険このうえないものかも、それぞれがいます。

女スパイのことについていえば、私 (キャノン) が、ただ一人会った女スパイは、諜報員の名にふさわしく、どの職業的男性スパイにも劣らない程に有能で、しかもその彼女は、小説にでてくるような

美女ではなくて、肥っているのなんの、初めて会った時には彼女はもう臨月ま近かの妊婦ではないのかなあ、と思ったくらいでした。

スパイたちは、彼等の政府から支援を受けるよりも、むしろ彼等自身の政府のいくつもの対立した情報機関の競争的なあおりを受けることがあるのです。特に彼（スパイ）が有能な場合には、官僚的な嫉妬が敵側のスパイ以上に、彼の使命遂行を混乱させるのです。そしてその各種の系統の違う当局（情報機関）間には、実際、相互協力がほとんどないのです。

その一例をあげると、私が最初にゾルゲのことを知ったのは、東京の焼けたドイツ大使館の中の金庫を爆破して開けた時でありました。私は金庫から出てきたドイツ大使館の極秘記録の中に、ゾルゲの名前が何度もサインをされているのを見ましたが、その名前は私の良く知らないものだったし、箱根に抑留されていたドイツ大使館員のリストの中にも、また彼の名前は記録されていなかったのです。私は日本の前特務機関の人から、ゾルゲは約一年前にスパイ罪で絞首刑にされたことを聞きました。ゾルゲが外国大使館を工作活動の拠点にしていたことは事新しいことではありません。彼（ゾルゲ）はそれよりも先に、ハルピン（満州）にあったアメリカ領事館を拠点にしていたのです。

私の次の関心事は、彼（ゾルゲ）の仲間たちのことでした。彼等は、用意周到な計画のもとに、背後で米国内務省に働きかけ、その極秘指示があつて結局 S C A P ・ G H Q 命令により、政治犯として釈放されたことが、調べたあとから分りました。

私の最初の目標は、ゾルゲの仲間の一人であつたマックス・クラウゼンを捕えることでした。私は

はんの一足違いで、監禁されているマックスとその妻を、セダ山というところで捕えそこないました。事実、彼マックスはすぐあわてていたので、彼とその妻は衣類のほとんど英文で書かれた報告書のコピー等を残したまま立ち去ったので、私はそれ等の文書から彼（クラウゼン）が、わがほうのC I C（対敵防護部隊）と接触を持っていたし、それにC I Cは彼を有能な諜報者とみなし、トップレベルの情報提供者として高く評価していたことが分かりました。彼はダブルエージェント（二重スパイ）だったのです。彼の残していった地図つきの手帳から調べあげて、彼の一味の無線士と彼が使用していた装備を押さえることになりました。

いま当時をふり返ってみると、日本に戦後の国家安全保障というものがあつたとすれば、日本人はその安全保障が確保されたことに対し感謝すべき人は唯一人、チャールズ・A・ウイロビー陸軍少将（当時GHQの情報部長）です。彼ウイロビー將軍は当時もそうであつたし、また現在もそうですが、定見のない、ぐらつくアメリカの対外政策という克服できないハンデキャップのもつて、工作活動をした献身的な將軍でした。しかしこのようなアメリカ政府の不定見のために、將軍自身、彼の能力を十分に発揮することができなかったし、それによって彼が日本に与えることができたであろう広範囲な貢献が成されなかったのです。

話しが本題からそれましたが、ところで皆さんの関心を持っている実際の諜報工作員というものは、二日酔い等よりは、ずっと深刻な苦痛にみまわれるものであります。

彼等スパイたちは、自分の仲間の諜報工作員たちによって、中傷されたり裏切られたりしやすいの

です。そればかりか敵側によって拷問を受けたり、毒をもられたり、刃ものでさされたり、銃で撃たれたり、時には絞殺されるかも知りません。

優秀な情報工作員は、狩人のカンを持っていなくてはなりません。そして熟練のチェスプレイヤーの注意力を持ち、目的の為に手段を選ばない確固たる信念を持たねばなりません。そのような人間こそ、この本の著者である延楨君なのです。私が延君を知ったのは一九四六年から一九五二年までの数年間ですが、この間、彼が自身の使命を達成し得なかったことは一度もありませんでした。彼は積極的で気転がきき、そして任務に忠実でありました。

私は彼を、私と働いていたすべてのクリスチャンたちよりも信用していました。

延君は私のもとで働いていたというかも知れませんが、しかし彼は私の良い対等の協力者でした。どの国でも、その国の情報機関が幸いに延君のような人たちで構成されていたら、平穩な眠りと平和な夢を持つことができるでしょう。

私は、延君のこの本が多くの人びとに読まれ、私たちの活動を、少しでも理解していただけることをのぞみます。

一九七三年二月

J・Y・キャノン

目次

この本に寄せて

J・Y・キャノン

密命の秘匿工作

Z機関の本郷キャンプ 13 特殊工作隊を編成せよ 17 敵に知られる前に殺れ 21 情報部員に人情はない 24

13

仁川上陸の先導

ジャクソン作戦開始 26 敵兵に声をださせるな 31 灯台の灯はともされた 32 中国軍が南下してくる 35 李承晩大統領から電報 37

26

Z機関の指揮官・キャノン

秘命をうけて、蒸発 39 誇りたかきテキサス人 43 ガンは百発百中の腕前 45 肝だめしに一発お見舞 47 待っていたぞ、ヨン! 50

39

ベールをぬいだキャノン

十八年ぶりの再会 52 いっそうふえた銃砲類 57 将校ぎらいの将校 58 得意の絶頂だった十年 61 はじめは法律家を志望 63

52

Z機関はこうしてつくられた

65

ソルゲ事件の残党追跡 65 東郷平八郎にあやかる 69 正式な下部組織はない 73 松の木はま
だあるか? 76

工作人員たちの匿された素性 77

アジトさがし 77 エージェントが正しい 81
工作人員はこうして作る 84 北鮮スパイはかりの
姿 86 単独行動こそ最上の道 88

鹿地亘事件「おやじ」の誤算 89

失敗は情報活動につきもの 89 拷問などし
ていない 93 食糧難の裏のスパイ戦 98 被害
妄想ではないのか 100

「スパイ失格者」鹿地の狂言自殺 102

諷問の真相 102 あいつはものにならんよ 107
コケ威しの自殺未遂 111 行動はかなり自由だっ
た 113

鹿地はなぜ釈放されたか 115

山田善二郎の駆け込み訴え 115 恩を仇でかえし
た板垣 120 三橋正雄はよく知らない 124 いっ
でも証人になろう 126

ラテン・クォーター事件の謎……………128

東洋のカボネー—テッド・ルーイン 夜の
東京は外国だった133 ラテン・クォーター開店
135 数奇な運命をたどった男137

新義州作戦—マッカーサーの失態……………141

ウイスキー部隊が待ってるよ141 海岸沿い
に島を攻略145 ニセの情報で敵は撤退148 ま
るで、ならず者部隊150 北鮮捕虜虐殺の悲劇
153

中国人民軍進攻・Z機関は正しかった……………155

十個師団の義勇軍155 名將・林彪がやってきた
160 危険な国連軍の行動163 マックは失敗を
かくした165 うれしくない銀星勲章167

死体奪取の北鮮潜入作戦……………168

元山にベスト?!168 ベスト会議はじまる172
敵地潜入もやむをえない174 將軍、敵前上陸作
戦を練る177 家族のことが思ひきれぬ179

元山秘密上陸—偽装北鮮軍進撃す……………181

駆逐艦二隻が支援 187 ゴムボートで決死的上陸

186 タイゲ……ツウ！ 189 一個中隊が敵軍に

バケた 191 ベストに向かつて進軍開始 193

野戦病院を襲い患者略取に成功 …………… 195

アタックの時間は午前零時 195 野戦病院の灯が

見えた 200 堂々と病院の中を回診 204

恐怖の診断―ペストではなかった …………… 208

お前たちはどこの部隊だ 208 ペストではなかつ

たよ 213 オマケに大部隊移動発見 217 真の情

報戦で勝利を得た 220

吉田首相と会う―内調誕生の真相 …………… 222

大磯へ行ってくれ…… 222 二人の少将の暗闘と

吉田 226 吉田茂と李承晩の出会い 231 緒方竹

虎に会ってください 233

Z機関、ひそかに緒方竹虎に協力 …………… 235

日本に情報機関を…… 235 吉田茂と緒方竹虎の

因縁 239 偽りの証言もムリはない 243 村井氏

を室長に内調発足 246

経済混乱を狙う『冷藏庫作戦』発動…………… 247

ニセ札づくりの四人 247 もうけ話があるんだが

251 ジョーが姿をくらました 255 アジトから

風の如く撤退 257

Z機関海上へ―中国大陸潜入計画…………… 259

ふたたび板垣青年の「デマ」 259 韓国で情報船

乗員を募集 263 早速警官隊に襲撃される 266

横須賀でT-34を手にいれる 270 板垣少年を雑

役夫にやとう 270

T-34作戦―海の謀略戦争…………… 272

海上謀略戦開始 272 ヒョンなことから捕わる 276

あやうく北朝鮮へ漂着…………… 281 板垣幸三はなに

も知らない 283

国民政府將軍Zユニットと結ぶ…………… 285

香港へ工作員派遣 285 香港で魏將軍をみつける

290 いっぱい食わされたか 292 魏將軍を香港

にもどそう
295

秘密工作員大陸に消える……………298

ウランを持って中国潜入 298 麻薬につられて寝

返る 304 ミイラ取りがミイラに 307 闇に消え

たエージェント 309

下山・松川事件の真犯人は誰か？……………311

キャノンは何もしらない 311 シヤグノン中佐と

いう男 315 Z機関は破壊工作はせぬ 318 情報

機関員なら爆破する 320 成功した工作は語れな

い 322

あとがき

装幀 石川 勝
長谷川 裕

キャノン機関からの証言

密命の秘匿工作

Z機関の本郷キャンプ

——キャンノン機関の本拠は、豪邸と呼ぶにふさわしい本郷の岩崎別邸であった。三菱財閥の遺産ともいえるこの邸宅は、テニスコートを持つ広大な庭を前にして、数多くの部屋のある母屋と、優雅な離れがっつらなっている。いまは、法務省の『裁判所書記官研修所』の看板がかかっているが、当時、わたしたち機関員はここを、本郷キャンプ、といいならわしていた。

「ヨン（延）、おやじが呼んでるぜ」

と、同僚にいわれて、わたしがその二階にあがっていったのは、朝鮮戦争の勃発する約三週間前のことである。

下山、松川、三鷹……といった、不可解な公安事件があいついだのは、一九四九年（昭和二十四年）のことだ。深刻な食糧難と、人員整理による失業者の増大が、占領初期の日本に社会不安をつのらせ、その不安が頂点に達したのが、この年だった。混沌とした世情を反映するように、これら一連の

事件はおこり、そのたびごとに登場したと伝えられるのが、黒い謀略機関であり、殺し屋・キャンであった。

その結果、日本の人たちは、占領中におきた不可解な事件はすべてキャン機関のしわざであるかのように考えているところがある。しかも、この機関の実態については、ほとんど知られていないようである。

たとえば、日本の戦後史のナゾの部分にメスを入れた、作家の松本清張氏ですら、著書『日本の黒い霧』のなかで、『キャン機関は横浜に本拠を置いて東京・神奈川方面を担当した謀略機関』と定義しているが、それがまったく誤解であることは、これからわたしが述べることから理解していただけるであろう。松本氏に代表される日本の知識人は、Z機関——つまり、彼らのいわゆる「キャン機関」を、旧日本軍の特務機関と同じような性格に見なしたものと思える。

一九七〇年十一月、わたしはアメリカに渡り、南部のニューメキシコで、ある任務についているキャンノ氏と十八年ぶりに再会し、かれは、わたしとともに、この「キャン・メモ」を発表することを約束してくれた。さらに、わたしたちの上司であったウィロビー少将は、フロリダの自邸で、「真相発表」をこころよく許し、わたしの肩をたたいて、

「成功を祈る」

と、いつてくれた。キャンノとともに情報将校として行動したわたしは、これから、機関にまつわる数々の誤解をときつつ、歴史の真相を告白してゆこうとしている。